5 月9日（土曜日）「エリヤ（1）預言者の登場」

【新改訳 2017】

Ⅰ列王記 17•1ー7

「ギルアデの‥‥ティシュベ人エリヤはアハブ（王）に言った。『私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ2，3年の間は露も雨も降らないであろう。』」（1節）

王国が南北に分裂して以来、それぞれの王位は世襲制のようにその子に継承されましたが、宗教的にも道徳的にも堕落と腐敗の一途をたどりました。特に北イスラエルはそうでした。地上に神のみわざを進めるのに、もはや王制は頼むに足らずという状態となってしまい、神は一方的に特別な人物を起こしてみこころを語らせ、また、世直しをさせました。それが「預言者たち」でした。

ここに、まずエリヤが登場したのです。エリヤとは「主は私の神」という意味だそうです。エリヤが三年もの間雨を止め、また降らせた話は、その後も信仰者の祈りの大きな励ましとされてきました。「義人の祈りは働くと、大きな力があります」（ヤコブ5•16-18参照）とも教えられています。

～祈り～

主よ。キリストにある義人たちにも、その祈りが働いて大きな力を現わすようにあわれんでください。

【学びのために】

「エリヤ」前 9 世紀前半に北王国イスラエルで活躍した預言者（Ⅰ列王記 17 章−Ⅱ列王記 2 章参照）。「ティシュベ人エリヤ」と記して他の同名者と区別され、「力の預言者」として知られています。。